

オスカー・ワイルドの 短篇小説

——モチーフ・構成・文体——

梅津 義宣 著



The Canterville Ghost



The Model Millionaire

Sphinx Without a Secret



Arthur Savile's Crime

旺史社

オスカー・ワ 短篇小説

——モチーフ・構成・文体——

梅津 義宣 著

江苏工业学院图书馆
藏书章

The Canterville Ghost

Lord Arthur Savile's Crime

The Sphinx Without a Secret

オスカー・ワイルドの短篇小説

——モチーフ・構成・文体——

梅津義宣 著

1992年4月1日 発行

定価 2000 円

本体 1942 円

発 行 者 田 中 晴 雄

印 刷 所 株式会社 亨 有 堂

発行所

東京都新宿区原町 1-3
電話 (03) 3202-2812

旺 史 社

振替 東京0-399953

ISBN4-87119-046-3

製本 (有)小泉製本所

オスカー・ワイルドの短篇小説

——モチーフ・構成・文体——

梅津義宣 著

旺史社

中扉イラスト 三輪美奈子

は し が き

研究の対象としての“Oscar Wilde”を考えてみる。

この〈19世紀末イギリスの代表的唯美主義作家 Oscar Wilde〉に接近する道は多岐であり、しかもそれらは複雑に絡み合っている。そしてその道は険しい。「彼」自身、そして彼を取り巻く状況があまりに多彩だからである。

はじめに、波乱に富んだ生涯を送った一人の「人間」としての Oscar Wilde を考究する道。まず、これが「彼」に近づく一つの道、と考えられる。——毀誉褒貶の彼の実人生そのものを徹底的に浮き彫りにする。ここでは、彼の「生」に関する緻密な資料調査が肝要だろう。さらには、その「実人生」と彼の道徳観・宗教観・芸術観との相関関係を鮮明に洗い出す。

次に考えられるのは、彼の先覚 John Ruskin や Walter Pater との関連において（例えば「唯美主義の系譜における Oscar Wilde」というような観点から）Wilde を考察するアプローチである。ここでは、ヘレニズムの問題に触れずに済まされない。さらに、風習喜劇の鼻祖 George Etherege から William Congreve, Richard B. Sheridan の系譜を視座としながら「風習喜劇作家 Oscar Wilde」の位置付けを考察することも課題になってくる。この際、当然のこととして、近代イギリス演劇の礎を築いた George Bernard Shaw との関わりが問題となる。この二人（Wilde と Shaw）を対照的に考察すること自体が大きな課題なのである。

さらには、Wilde の「芸術論」を中軸として、彼の童話集、

劇作品、小説（短篇・長篇）、詩作品などを互いに関連させながら考察するのも一つの道である。この時、構成・文体・レトリックなどの問題がその作品のモチーフと連結して課題として浮かび上がってくる。すなわち、〈言語と文学の接点〉とも言うべき点が研究の課題となるのである。

しかし、これらのさまざまな方法論が渦巻くなかで、なによりも肝要なことは、作品そのものに内在する証拠、すなわち研究者自身の内面と次第に深い関わりを持つことになるであろう証拠に対して素直な直覚力を持ち続けることであろう。Reginia Gagnier はこれを〈内在的証拠〉(internal evidence) と呼び、「この証拠こそやがて次第に理論家（研究者）自身の内面と深い関わりを持つものである」と述べている。(Reginia Gagnier, *Idylls of the Marketplace: Oscar Wilde and the Victorian Public* (Stanford: Stanford Univ. Press, 1986), p. 43.)

本書は、あくまでも作品を素直に読むことからくる印象・感動・理解を研究の基盤に置きながら、Wilde が 1887 年に連続的に発表した 4 篇の短篇小説について、とりわけ「モチーフ」・「構成」・「文体」の観点から、〈総合的〉に考察するものである。〈総合的〉というのは、一つには、あくまでも作品を素直に読むことによって得られる印象・感動・理解を研究の基盤に置きながら、前に述べたさまざまな考察を採り入れ、総合的な論究を試みたいと考えるからである。このように多種のアプローチを総合的に採り入れることによって、「作品自体から直接伝わってくるもの」に、より確かな説得力が付与されると確信する。さらに、〈総合的〉というのは、作品の「モチーフ」・「構成」・「文体」三者の相互関係を明らかにすることが作品の《本質》に接近する一つの確かな道であると考えからである。

当然、「本書ではなぜ彼の短篇小説を取り上げるのか」という問いが投げられるであろう。これに答えるために、ここで、本書執筆の目的と根拠について述べてみたいと思う。

Oscar Wilde が短篇小説の創作を手がけたのは、彼が “The Woman’s World” の編集に当たるとともに “The Pall Mall Gazette” の書評を担当していた時代、すなわち 1887 年のことである。1887 年、2 月から 6 月にかけての短い期間に、彼は精力的かつ集中的に四編の短篇小説を発表する。

まず、The Canterville Ghost: A Hylo-Idealistic Romance を 2 月 23 日・5 月 2 日の二回に分けて “The Court and Society Review” に掲載する。そして 5 月中に、Lord Arthur Savile’s Crime: A Study of Duty を “The Court and Society Review” に三回に分けて連載する（11 日、18 日、25 日）。さらに 5 月 25 日、Lady Alroy を “The World” に掲載する。これは後に The Sphinx Without a Secret: An Etching と改題される。これに引き続いて、④ 6 月 22 日、The Model Millionaire: A Note of Admiration を “The World” に掲載する。やがて、これら 4 篇の短篇小説は一つに纏められ、1891 年 7 月、Lord Arthur Savile’s Crime and Other Stories と題する単行本として刊行される。

1884 年 5 月（短篇小説創作のほぼ 3 年前）、Oscar Wilde はアイルランドの著名な弁護士の娘 Constance Mary Lloyd と結婚し、翌 1885 年 1 月には、ロンドン市内の閑静な住宅街、チェルシー地区タイト・ストリートに転居する。この年の 6 月、長男の Cyril が誕生し、翌 1886 年 11 月には次男の Vivian（後に Vyvyan と改名）が誕生する。この新婚生活の部分は、Wilde の生涯における、ほとんど唯一の安泰なく無

風地帯〉であると言っても過言ではない。彼の生涯の他の部分があまりにも波乱に富んでいるからである。

この〈無風地帯〉とも言える時期に、Wilde は “The Woman's World” の編集者として、また “The Pall Mall Gazette” の書評執筆者として健筆を揮いながら、童話、論文、短篇小説の執筆のために精力的な活動をする。とりわけ、1887年に連続的に発表された四編の短篇小説は、この頃の Wilde の明るく軽やかな気持ちを反映するものである。いずれも彼一流のアフォリズムと軽妙なユーモアと皮肉を交えた肩の凝らない痛快なもので、短篇小説の妙味を十分に生かした作品である。

これらの短篇小説に関して共通して言えることは、まず、終結の部分に「予期せぬ落ち」を設定しながら心憎いほど巧みな構成を行っている点である。ここには巧みな説話者としての Wilde の特質が顕著に表れている。また巧緻な構成を行いながら徐々に作品のモチーフを明らかにしてゆく手法や、極度に作為的な言語操作の形跡が見られる文体もまた彼の短篇小説に共通する特徴である。

また、看過することのできない重要な点がある。それは、「これらの短篇小説は、後に発表される彼の諸作品への〈序章的な（あるいは先駆的な）役割〉を演ずるものである」ということである。彼の唯一の長篇小説 *The Picture of Dorian Gray*, *The Importance of Being Earnest* を頂点とする風習喜劇、それに 19 世紀末を代表する傑作の一つと見做される一幕劇 *Salomé* に関して、モチーフ・構成・文体などの観点から考究すれば、これらの短篇小説がそれらに与えた影響の大きさが判明してくるであろう。つまり、短篇小説創作の過程で終始一貫して遵守された Wilde 流の手法は、彼の後の代表的な諸作

品に確実に踏襲されているのである。また「これらの短篇小説は、後の代表的諸作品に先駆けて、Wilde の芸術論を確かに具現化したものである」と言うことができる。「芸術が人生を模倣する以上に人生が芸術を模倣する」、「外界の自然もまた芸術を模倣する」とか「芸術家とは美しいものの創造者である」というような芸術至上主義の旗幟を鮮明に掲げた Wilde の基本的な主張が、すでにこれらの短篇小説創作の基盤を形成していると言えるのである。

以上述べたいいくつかの〈注目すべき点〉を根拠・基盤としながら本書執筆に励んできたつもりではあるが、論究の浅い点、稚拙な点が多々あると思われる。御教示をいただければ幸いである。

※

なお、本書第一章『キャンタヴィルの幽霊』論は、東北英文学会・第43回大会（1988年10月8日、秋田大学）において口頭発表したものをもとに加筆したものであり、同様に、第三章『謎のないスフィンクス』論は、日本ワイルド協会・1989年度秋季大会（1989年12月2日、実践女子大学）において口頭発表したものを補正・加筆したものである。

使用したテキストは *The Works of Oscar Wilde* (1948; rpt. London and Glasgow: Collins, 1961) である。なお、各引用文の末尾にそのページ数を付した。

また、テキストからの引用文の日本語訳は、『オスカー・ワイルド全集』（西村孝次訳）（東京：青土社、1988）を使用させていただいた。同全集の優れた訳業から本書に引用することを御快諾下さった西村孝次先生に、厚く御礼を申し上げたい。

最後に、本書に趣きを与える挿絵を描いて下さった三輪美奈子氏に、そして、拙論を上梓するにあたり編集・校正などに多大の労をとって下さった旺史社の飯田常雄氏に心より感謝の意を表したい。

1991年8月

著 者

オスカー・ワイルドの短篇小説

——モチーフ・構成・文体——

目 次

はしがき	3
プロローグ I. Oscar Wilde 評伝	11
II. Oscar Wilde 年譜	24
第一章 『キャンタヴィルの幽霊』 論 (<i>The Canterville Ghost</i>)	29
—「光」と「影」の交錯—	
第二章 『アーサー・サヴィル卿の犯罪』 論 (<i>Lord Arthur Savile's Crime</i>)	57
—「手相に現われた宿命」と「義務としての殺人行為」—	
第三章 『謎のないスフィンクス』 論 (<i>The Sphinx Without a Secret</i>)	95
—「神秘」への誘いと言語操作—	
第四章 『模範的百万長者』 論 (<i>The Model Millionaire</i>)	119
—プロット構成の妙味とサプライズ・エンディング—	

注	141
書 誌	146
索 引	150

プロローグ

I. Oscar Wilde 評伝

Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde は 1854 年 10 月 16 日、アイルランドのダブリンに生まれた。Oscar 命名の由来については、スウェーデン王 Oscar 一世の底翳（そこひ）の治療に成功した父親が王の許可を得て命名したとも伝えられ、また、母親が心酔するケルト神話の英雄であり詩人でもあるこの名前をつけたものだとも言われている。

父 William Robert Wills Wilde (1815-1876) は眼科・耳鼻科の名医として知られ、「近代耳科医学の父」と賞賛されている。しかも、その一方で、民族学・考古学・文学にも興味を抱き、その方面での業績もめざましいものがあり、1864 年には「ナイト」の称号が与えられている。しかし、このような高い社会的地位と名声とは裏腹に、女性関係で絶えず世間を騒がせていたことも事実である。

母 Jane Francesca Elgee (1824-1896) は、弁護士の娘で、フランス語・ドイツ語に堪能な詩人であった。William Wilde と結婚後もそのすぐれた才能を発揮し、“Speranza”のペンネームで詩作や翻訳といった文化活動のみならず、民族学の分野でも活躍し、アイルランド民話の再話の本も刊行している。同時に、彼女は、アイルランドの独立を叫ぶ闘士としての片鱗も生活の所々に示している。

ところで Jane は、Oscar が生まれる前から女の子が欲しく

てたまらず、その願望はいつしか「女の子が生まれるはずである」という信念に変わっていた。それは、彼女が、Oscar が生まれる前から、女兒用の衣裳を数多く用意していたという事実によっても証明される。しかし実際は、母親の希望とは逆に、男の子が生まれたのである。もちろん Jane の失意は大きかったが、所期の希望を捨てきれず、彼女は Oscar を「女の子」として育て始めたのである。ビロードのスカートをはき、長い髪をカールした幼い Oscar の写真が残されているが、これではどう見てもかわいい「女の子」である。彼の幼児期に行なわれた異常な養育の事実は、後の彼の性癖、趣向、芸術観などに重大な影響を及ぼしたものと考えられる。彼の心理にある種の「性的倒錯」が生じる要素がこの時期にすでに培われていたとも考えられる。やがて彼がロンドンの社交界において「唯美的服装」(Aesthetic Costume)で有名になる原因もこの頃すでに芽吹いていたといっても過言ではないだろう。

Oscar Wilde の教育は、「アイルランドのイートン校」と称せられたポートラ・ロイヤル・スクールに始まる。早くも入学時から、彼は、文科方面の学科で卓越した才能を見せる。これは、入学して間もない彼が、この学科では、三年生の兄 William (父と同名)と同じクラスで学習することが許されていることでも明らかなことである。在学中、妹の Isola が8歳で夭折(この時 Oscar は12歳)。真に心の通い合った妹の死が多感な彼の心に大きな衝撃を与えたことは隠せない。1881年に発刊される *Poems* 中の“Requiescat”は彼女の死を悼んで詠んだものである。

1871年、Oscar は奨学金を得てダブリンのトリニティー・カレッジに入学。ここで古代史担当の John Mahaffy 教授(1839-1919)と出会う。彼の薫陶を受け、西洋文化の一大源

流くヘレニズムへの強い関心を持つようになる。ギリシャ語やラテン語の古典に優れた成績をおさめ、Berkeley Gold Medal for Greek など各種の名誉ある賞を獲得している。

1874年10月、Oscar はさらにオックスフォード大学モードリン・カレッジに入学。後年、彼が *De Profundis* で「私の生涯には二つの大きな転換期があった。それは父が私をオックスフォードに送った時であり、あとの一つは世間の人々が私を牢獄に送った時である」と述べているように、この〈オックスフォード時代〉は彼にとって重大な意味を持っていたのである。ここで彼は、これまでに味わったことのない中世的な気高さと自由とを満喫する。

- ① オックスフォード大学時代の Wilde に最も大きな影響を与えたのは、何と云っても、Walter Pater (1839-1894) と John Ruskin (1819-1900) の二人の教師である。「オックスフォード大学の第一学期に Pater の *Studies in the History of the Renaissance* を読み、自分の人生に奇妙な影響を受けたのを記憶している」と Wilde は *De Profundis* で回想している。在学中、すでに、この Pater からは、“Art for Art’s Sake” の精神を、そして Ruskin からは “Art for Life’s Sake” の精神を彼は修得している。このように、オックスフォード大学の二人の教師との運命的な出会いを通して Oscar Wilde の唯美主義・芸術至上主義の根幹が形成されていったのである。
- ② オックスフォード大学時代、もう一つ Wilde に影響を与えたものがある。それは、1875年と1877年の二度にわたるイタリア・ギリシャへの旅行である。これらの旅は、いずれもトリニティ・カレッジの恩師 John Mahaffy に随行してなされたもので、Wilde のカトリシズムへの憧れとヘレニズムへの心酔とを増幅させることになる。そして旅の成果はそのまま彼の

詩作に現れる。イタリア旅行で訪れた美しい古都ラヴェンナを詩った 332 行の長詩 *Ravenna* が「詩人の登竜門」とされる Newdigate Prize を獲得する。

1879 年の秋、オックスフォード大学を卒業した Wilde は、大きな野心を抱いてロンドンにやってくる。大学時代の友人 Frank Miles (1852-1891) とソリズベリー街に住むことになる。Wilde の野心成就策の第一段は、まずロンドンの社交界に足を踏み入れて自分の名を売り込むことであった。詩集出版の目的もあり、自らを「美の使徒」と呼び、「唯美的服装」を身に纏いロンドンを闊歩する。当時のマスコミもこの異様な行動を皮肉まじりに紹介し、その結果、Oscar Wilde の名は全国的に流布されることになる。驚異と衝撃を与えることによって世人の注目を集めようという彼の作戦は功を奏し、自費出版した *Poems* も五版を重ねることができたばかりでなく、講演の依頼が次々と寄せられる。このような一連の流れを総合すると、約一年にわたるアメリカ合衆国講演旅行は、Wilde の奇抜な売名努力の当然の結果であるといえるだろう。

1881 年 12 月 24 日、Wilde を乗せたアリゾナ号はリヴァプールを出帆する。翌 1882 年 1 月 2 日、ニュー・ヨークに到着。彼を迎えるアメリカ人の歓迎ぶりは、まるで一流の芸能人を迎えるのに等しかったという。「今ヨーロッパで流行する唯美主義の旗幟 Oscar Wilde とはいかなる人物なのか」…当時のアメリカ人はこの目でそれを確かめたかったのである。報道関係者が取り巻き、一方では彼のブロマイドが飛ぶごとくに売れた。しかし、Wilde が合衆国各所で行なった 100 回に近い講演の内容は、一般大衆の期待に反して、きわめてアカデミックなもので、その主なタイトルは「イギリス芸術のルネッサンス」・「家屋装飾」・「19 世紀のアイルランド詩人」・「アメリカ